

聖書:ルカの福音書17章1～10節

説教:悔い改めるなら赦しなさい

はじめに

さきほど皆さんと一緒に祈った「主の祈り」の中に、「私たちも私たちに負い目のある人たちを赦します」という一節があります。ほかの所は大きな声で祈れても、ここだけ声小さくなってしまふ、あるいは声に出すことができない、という方もおられると聞いたことがあります。心の中のことを振り返ると、その人に対する怒りや憎しみがどうしても残っていて、赦しますとはとても言えない、ということでした。ところが、今日の箇所には一日に七回赦しなさいと、まるでたたみかけるような言い方が出てきます。そればかりではありません。ひき臼を首に結びつけて海に投げ込むというような物騒な話があったり、桑の木が海に植わるような信仰とか、どれも度を越したような話が次から次へと出てくる。いったいこれはどういうことなのか、ともに考えてまいります。

1 赦しについて

1) つまずきを与える者

1, 2節を読みます。「イエスは弟子たちに言われた。「つまずきが起こるのは避けられませんが、つまずきをもたらす者はわざわいです。その者にとっては、これらの小さい者たちの一人をつまずかせるより、ひき臼を首に結び付けられて、海に投げ込まれるほうがましです。」

「人をつまずかせる」と聞いて、多くの方はドキリとするかも知れません。自分の言ったひとことでつまずかせてしまい、教会に来なくなった人がいる。友人を教会に誘おうとしたら、ぴしゃりと断られ、それ以来、信仰の話ができなくなった。誰でもそんな経験がひとつやふたつあるでしょう。そうするとほとんどの人は海に投げ込まれることとなります。これは困ります。

2) 自分自身に気をつけなさい

その疑問は一旦わきに置いて、とりあえず3節をみましょう。3節はご覧のとおり二つの文章があって、前半は「あなたがたは自分自身に気をつけなさい」です。はて、自分以外の人に気をつけるのならわかりますが、自分自身に気をつけろとはどういうことか。いったいどんなことに気をつけろというのでしょうか。

その疑問は3節の後半の文章とも関わってきます。「兄弟が罪を犯したなら、戒めなさい。そして悔い改めるなら、赦しなさい。」

「罪を犯したなら、戒めなさい。」こんなことを聞くと、初めての方には教会は警察のようところかと驚かれるかも知れません。もちろん、こんなことは滅多に起きません。しかしそれでも希にこうしなければならないときがあります。というのは、もしそのまま罪を見過ごしていったなら、どうなるかを知っているからです。やがてその兄弟は信仰を失うことになるでしょう。それだけではない、教会も神の聖さを失って苦しむことになるからです。なので大変なことではあるのですが、兄弟が悔い改めて聖さを取り戻せるように向き合います。

3) 一回なら赦せても

そこで悔い改めていただければこんなうれしいことはありませんが、物事はそう単純にはいかない。しばらくしたらまた罪を繰り返してしまうことがある。そういうときどうするか。4節にはこうある。「一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回あなたのところに来て『悔い改めます』と言うなら、赦しなさい。」皆さんこれできますか。

「仏の顔も三度まで」と言いますから、三回までは赦せても、それ以上はもう我慢ができない。

「どうせ口先だけだろう」とか、「自分は甘く見られているのだろうか」と疑ってしまう。とても赦す気にはなれません。

2 信仰について

1) 信仰を増し加えてください

これを聞いていた弟子たちも相当困惑したようで、5節でこう言います。「私たちの信仰を増し加えてください。」

一日に七回も赦せるよう、私たちの信仰を強めてください。そう訴えた。弟子たちでさえこうなのですから、まして私たちが一日に七回も赦すことなどできそうもありません。イエスは、なぜ私たちにできそうもないことを命じるのでしょうか。

2) からし種ほどの信仰もない

イエスはこう答えます。6節。「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があれば、この桑の木に

『根元から抜かれて、海の中に植われ』と言うなら、あなたがたに従います。」

スーパーに行くときガラス瓶やチューブに入ったマスタードが売っていますが、あのなかに入っている粒々がからし種なのだそうです。いかにも小さいのがわかります。そんなちっぽけな信仰でも、桑の木に命じれば海の中に移る。他の箇所では、「山に向かって、海に入れと言え、そうなる」と書いてあります。私は、以前それでために祈ったことがある。「藻岩山、立ち上がって海に入れ。」結果はご覧のとおりです。私だけではなく、いまだかつて信仰によって山を動かした人はいません。ということは、からし種ほどの信仰を持った者はだれもいなかったわけで、イエスが求める信仰のレベルは相当に高い。

私たちは小さな者に過ぎませんが、それでも神さまを信じたいという願いは大切にしてきたつもりでした。ところがあなたがたにはほとんど信仰がないと切り捨てられてしまったようなもので、これでは途方に暮れてしまうばかりです。

3 イエス

1) 私たちの模範となる

こんなふうにごこのところは大変厳しい話しが続き、数えてみると三つもありました。一つ目。人をつまづかせるような者はひき白を首に結びつけて海に投げ込んだほうがよい。二つ目。あなたがたは一日に七回でも赦しなさい。三つ目。あなたがたの信仰はからし種にも及ばない。どうしてイエスはこうも厳しい話しをするのか。ほとんど困ってしまうわけですが、実はそこがここを読み解いていく鍵となります。

こんなことを考えてみてください。口では偉そうなことを言うけれど、自分ではちっともやらない、そういうリーダーと、自ら率先して模範を示すリーダー。皆さん、どちらのリーダーを信頼しますか。当然、率先して模範を示すリーダーですね。ではイエスはどうでしょう。これだけ厳しいことを言うからには、当然ご自分でもそうするはずではないですか。そこで、ここにあることを全部イエスご自身に当てはめてみたらどうなるか。そんなふうに考えてみましょう。

2) つまづきの石：死んでよみに下られた

では一つ目の「つまづきをもたらす者」、それをイエスに当てはめてみます。でもいきなり当てるのは難しく、ちょっとヒントが必要です。それがイザヤ書8章14節です。「そうすれば、主が聖所と

なる。しかし、イスラエルの二つの家にとっては妨げの石、つまづきの岩となり、エルサレムの住民には罨となり、落とし穴となる。」

つまづきをもたらす者とは、イザヤ書によれば「妨げの石」、「つまづきの石」と呼ばれているもの、すなわち主ご自身のことだった。ちょっと驚いたでしょうか。でもそれが本当だとしたら、いったい誰がイエスにつまづいたのでしょう。16章で見てきたとおりです。パリサイ人がイエスにつまづき、イエスを憎んで十字架に追いやっていきます。それだけではない。イエスについて来ている人々も弟子たちもやがて見捨てていく。みなイエスにつまづいていきます。

そうすると2節のことはどうなるのでしょうか。つまづきをもたらす者は海に投げ込まなければなりません。でも、主は海に投げ来れなかった。そう言うのでしょうか。そうではない。主は十字架におつきになり、いのちを捨てて死の世界、よみと呼ばれるところに下ります。そこは最も深い地の底にあると言われていいますから、海どころか、もっと深いところに投げ込まれていきました。

3) 赦し：一日に七回罪を犯す者であっても

では二つ目の、一日に七回でも悔い改める者を赦す。これについてはどうでしょう。私たちにはとてもできそうにない話でした。ところが、神の目からご覧になるなら話しはまったく別です。一日に七回も罪を犯して悔い改めている、そんな信用もできない者とは誰か。私たちでしょう。ところがそんな私たちでも主は赦して下さるというのです。こんなことできないと頭を抱えていたら、実は大変な恵みのことばでした。

4) 信仰：取るに足りないしもべとなられた

ここで疑問が湧きます。そんなすばらしいことならば、もっとはっきりわかるように語ればいいのにとお思いませんか。その答えは、10節にあります。「自分に命じられたことをすべて行ったら、『私たちは取るに足りないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。」しもべと主人の話がいきなり出て来て戸惑いましたが、実は主がこのようにしもべの姿をとっているのだとこっそり教えておられた。すべてがこんな調子です。イエスがご自分の口で「わたしはあなたがたのためにこんなことをしてあげます」と言うようなことは絶対に言いません。

この社会で「私はなすべきことをしただけです」と言っていたら、だれからも評価されませ

ん。でもイエスはこの道を歩まれ、十字架につけられていきます。

そのときイエスはどうしていたのでしょうか。絶望していたのか。いいえ。父なる神が必ず必ず死からよみがえらせてくださると信じていた。いのちは捨てましたが、信仰は捨てなかった。これがイエスの模範です。

私たちはからし種ほどの信仰もなかったけれど、イエスは死からよみがえることを信じていた。でも、死んだ者がよみがえること。それを信じることはどれくらいのことだったのか。桑の木が海に植わる。それだけでもとても信じられないのですが、イエスはそれ以上のもっとも困難と思えることを信じ続けました。

5) 自分自身に気をつけなさい

最後に考えます。イエスはこう言っていました。「自分自身に気をつけなさい。」一体何に気をつけるのでしょうか。私は人を赦すことができる心の広い人間である。もしそう思っているなら気をつけなさい。あなたは本当は人を赦せない思いで苦しんでいるのではないか。私はあの人この人のために、たくさんのかんことをやって上げた。もしそう思っているのなら気をつけなさい。本当は自分が取るに足りないしもべであることに気がつかないのですか。

自分のことはなんでもわかっている。誰もがそう思いたい。けれども実は気がついていない。大きな罪があるのに、そのことを見ようともせず、小さな罪だけ見て悔い改めているふりをし、そのことを誇ろうとさえしている。私は信仰があると思って満足している。

そんな私たちにイエスは光を当て、心の内にあつる暗闇にを明るみ出そうとします。どうしてそんなことをするのでしょうか。どうしてそっとしておいてくれないのでしょうか。永遠のいのちを与えたいからです。私たちがつまづかないようにと、すべてをお捨てになった主の御名をあがめます。